

民国、中華人民共和国、日本、フィリピン、マレーシアの各国の学術推進機関（アカデミー等）から推薦された人文・社会科学系及び自然科学系の科学者21名（日本からは、近藤次郎日本学術会議会長及び川田侃同副会長が出席の予定）

- (5) 議題  
「アジア地域における学術の発展とそのための連携・協力について」

### 日本学術会議主催公開講演会

#### —— 女性科学研究者に期待する ——

日本学術会議は、学術の成果を国民に直接還元するための活動として、日本学術会議会員が講師となって、市民を対象に年3回公開講演会を開催しています。

この度、次の公開講演会を開催しますので、お知らせします。多数の方々の御来場をお待ちしています。

- (1) 日時 平成5年11月26日（金）13:00~16:30
- (2) 会場 日本学術会議講堂  
（地下鉄千代田線「乃木坂駅」下車徒歩1分）
- (3) テーマ 「女性科学研究者に期待する」
- (4) 演題及び演者  
・女性科学研究者問題に関する日本学術会議の取組

須藤 一（第5部会員、東北学院大学工学部教授）

- ・女性学ジェンダー論の発展と役割  
加藤春恵子（第1部会員、東京女子大学現代文化学部教授）
- ・自然科学分野に見られる女性進出とこれに伴う諸問題  
本間 愼（第6部会員、東京農工大学農学部教授）
- ・女性科学研究者の地位向上と基盤整備（スウェーデンを例として）  
一番ヶ瀬康子（第1部会員、日本女子大学人間社会学部長）

〔申込方法〕

聴講（入場無料）を希望される方は、はがきに、郵便番号、住所、氏名を明記し、11月12日までに下記までお申し込みください（複数人の連記可、FAX送付可）。締切り後も、席に余裕があれば、受け付けますので、下記までお問い合わせください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34  
日本学術会議事務局「公開講演会係」  
TEL 03-3403-6291(代) 内線228  
FAX 03-3403-6224

## 書評

### 宇宙の黒幕——

#### ブラックホールの素顔

岡本功・鎗木修著

岩波書店「New Science Age-3」シリーズ50  
定価1200円 128ページ

著者2人は6年ほどの差はあるがともに昭和2桁の生れ、東北の地にフィットした重厚な研究態度で天体物理学の第1線で活躍している世界的な研究者である。野球にたとえるならば、重い球を投げるピッチャーで、スピードは岡本が勝るが、鎗木の球は一層重いスローボールである。岡本のまえがきと鎗木のあとがきを読むと二人の特色があらわれていて面白い。タイプはちがうが、二人ともロマンチストの多い天文学界屈指のロマンチストである。

まず、ブラックホールを黒幕になぞらえた所以が語られる。第1章黒幕登場、第2章黒幕の心理学は鎗木の受け持ちであるが、ホーキング・ブームに浮かされて飛びついた読者はここで鎗木の重

い球をガツンと喰わされる。しかし、ドライだがやさしい鎗木の解説は懇切で、単なる知識でなく本質を知りたい人には爽快感を与える。事象の地平面・エルゴ圏・（ブラックホール）エントロピーなど基本的だがむずかしい概念が精一杯やさしく説明されている。読者は二三度読み返して宇宙観を身につけるとよい。それも面倒な人は夢の世界に遊ぶつもりで傾に読んでも得るところがあるだろう。

後半の4つの章は岡本の受持ちとあるが、秋篠寺の技芸天の如く首と胴とのつながりは時代のちがい（著者のちがい）を超えてしっくりしている。話は恒星進化から始まる。それがやがてブラックホールの進化の話になる。それがすぎるといよいよ宇宙のエネルギー源としてのブラックホールの話へ進む。このあたりは二人の共同研究の成果の解説が含まれていて迫力がある。最後の章は岡本プロダクションによるバーチャル・リアリティーの世界である。こういう作品は学者に生真面目さを求める日本の読者にはあまり受けない可能性もあるが、欧米特にフランスあたりでは大いにもて

るのではないだろうか。

大乘起信論によればカオスの源は無明にあるが、宇宙の創生進化のきっかけは重力にある。その重力の申し子であるブラックホールはシバの神の如く破壊と創造の神である。いや、われわれはブラックホールの中に居るのかもしれない。宇宙に対する認識を拓ける本書の創造性を高く評価したい。

海野和三郎（近畿大生物理工学部）

## 宇宙史の中の人間

岩波市民大学—人間の歴史を考える—1

岩波書店 海部 宣男著

定価2,100円 244頁

いつの頃からか、学問が個別科学となり、20世紀の後半には、寸断されて、自然を包括的に理解するという試みは今やディレクタントィズムとして蔑視される羽目になった。まことに個別化、要素化は効率よく機能して現代文明の隅々にまで浸透してその成果を謳歌している。この書は少年の頃、自然に親しんで、世界を理解しようとした心で、個別科学の天文学に入りながらも、宇宙とその中の人間の占める位置を理解しようとする精神を今も持ち続けて、この世界を解き明かそうと試み、広く語りかけようと書かれたものと思われる。

シリーズの題名が示すごとく、扱う範囲は宇宙のみならず、地球、生命にわたり、著者自身で考え直し、解き明して話してくれる。内容を紹介するよりも読んで欲しい。書評というより私の感想を述べる。

宇宙と地球と生物と人間の時間の流れが、あたかもおとりが俯瞰するように語られ、人間が偶然と必然のはざまに存在するのだということが不思議な感動をもって迫ってくる。

宇宙膨張の中から、重力は折り目、節目に働き、宇宙の一部をまわりから切り離して、凝集し、閉じた系“圏”を作ってきた；晴れ上がり→大構造→銀河→星→太陽系→地球と、次々と作ってきた

小さな一連の“圏”の形成がこの生命の発生と進化には決定的であった。

特に、その最後？の段階であるこの地球生命圏バイオスフェアの進化の項は著者の広い関心と深い考察が見られて、おもしろい。

ビッグバンの発見以降、宇宙を過去に遡り、高温の宇宙論が天文学によって語られてきた。このことは本書にも述べられているが、逆に冷却の方向へと下ってみると構造の多様性、物質の安定性を生みだし、ついに自己複製する生命にいたる過程を述べている点、新鮮である。宇宙、地球、生命の3つの分野が織りなす成果が一人の人によって途切れなく語られ、そして、生命存在の必然偶然にまで想いをいたす。

まことに今の時代は稀有の時なのであろう。20世紀、人間が宇宙の全風景のなかでたたずんで、まわりの世界を理解できるようになったのである。宇宙膨張の中で次々と切り離されて辿り着いた小さな地球生命圏のまゆ玉の中から、再び宇宙の初めを眺めて考え込んでいるのである。それとも、古来、いつも人間は問い掛けてきたように、相も変わらず宇宙と自分の存在のことを思いめぐらせているだけなのかも知れない。著者によって、各章のはじめに掲げられている古今東西の文学や哲学の断章はそのことを言おうとしているのだろうか。

21世紀は20世紀の正と負との遺産を否応なく受け継がなければならない。21世紀もまた、別の意味で稀有の時代とならなければならない。要素化と科学によって到達した自然理解は20世紀後半には限界に直面する。技術が伴ったことによる科学の飛躍的発展とその膨大深刻な影響である。また、科学が国家によって運営される事態となった。さらには、技術は人間に畏怖すべきものを見失わせた。

扱う範囲も文章も贅肉がなく、引き締まっていて、読んでいて小気味良いスピード感がある。何よりも該博な知識を統合する喜びを味わえる。文